HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	新渡戸稲造と遠友夜学校 ： 現代の教育課題とのかかわりで
Author(s)	三島, 徳三
Citation	基督教學, 45, 40-50
Issue Date	2010-08-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/47480
Type	journal article
File Information	SC45_005.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

新渡戸稲造と遠友夜学校
―現代の教育課題とのかかわりで―

三島徳三

はじめに

明治二七年に新渡戸稲造夫妻によって創設され、昭和一九年に閉校に追い込まれた札幌遠友夜学校（以下「遠友夜学校」と呼ぶ）については、これまでいくつかの文献によって紹介されている。私は、一九九四年六月二一日に北海道大学学術交流会館で開催された「札幌遠友夜学校創立百年記念講演会」、及び『思い出の遠友夜学校』の出版（北海道新聞社）を柱とした百年記念事業において、石塚喜明・小塩進作・山本玉樹らの大先輩に混じって微力を尽くすことができた。

百年記念事業を行った当時では、まだ一部の遠友夜学校の関係者が健在であったが、それから十数年を経過した現在、彼らのほとんどはいまや幽明界を異にしている。そのため、遠友夜学校の存在は「遠友夜学校記念室」（札幌市）のみに閉じ込められ、いずれ一般市民の記憶から薄れていくに違いない。

しかし、貧民子弟などさまざまな事情から教育機会に恵まれなかった者を対象にした、その意味では北海道最初の社会事業ともいえるこの学校の歴史について、社会教育史といった視点から分析することは必要なことと私には思われるが、この課題はその方面の専門家に委ねるほかない。

私は閉校後半世紀以上を経過した遠友夜学校について、今後とも語り継ぐ必要があると思っているが、それは単な

るノスタルジアではなく、わが国の教育の在り方に関し、この学校が多くのことを示唆してくれるからである。

そこで本稿では、遠友夜学校の教育目標と教育実践の中身を整理し、そこから現在の教育に活かせるものがないか、考えてみたい。

一　新渡戸稲造揮毫の二つの扁額

昭和初期から閉校まで遠友夜学校の玄関付近には二つの扁額が掲げられていた。これは昭和六年五月一八日、新渡戸稲造が札幌農学校教授を辞して以降二度目で、また結果的に最後の夜学校訪問を行ったときに自ら揮毫したものである。

“With malice toward none, With charity for all.”
学問余里実行

前者の英文はエイブラハム・リンカーンの大統領就任演説の一部で、日本語では「何人に対しても悪意をいだかず、すべての人に慈愛をもって」と訳されている。

後者は当時の書き方によって右から左に向けて横書きされている。「余里」は「より」すなわち「学問より実行」ということである。五月一八日の遠友夜学校訪問で稲造は、在校生・教師その他の出席者に遠友夜学校設立の由来などについて講話しているが、その内容をまとめた記録の見出しも「学問より実行」になっている。

この二つの扁額は夜学校に登校する生徒・教師は必ず目にし、のちに紹介する有島武郎作詞の校歌とともに、「遠友魂」として胸に刻まれていた。扁額に書かれた二つの言葉は、新渡戸稲造が遠友夜学校に込めた思いの吐露、いわ

ば建学の精神であったと、私は考える。これらの精神によって実践された遠友夜学校の教育の中身はどのようなものであったのだろうか。生徒・教師の証言・記録の中からいくつか再現してみよう。

二　慈愛を根底にした人間教育

稲造自身が宮部金吾あての書簡に書いているように、遠友夜学校は、家庭が経済的に貧困で義務教育の機会が与えられていなかった子どもたち、あるいは晩学者に無償で教育の場を提供しようとする、一種のヒューマニズム（キリスト者である稲造は、それが「神の栄光を世に輝かしめる一助となる」と述べている）から設立されたといえる。宮部あての書簡によると、「貧しい両親をもった、粗野な子供たちや、労働者の少年など、出面の子弟に対する夜学校」の設立が、稲造がめざすものであった。

武士の家庭に生まれ、比較的恵まれた経済環境の中で、東京および札幌への遊学を許された稲造は、若くして聖書に出会った。聖書は、元来、貧しい人たちへの「救いの書」である。そのことは、たとえばイエスの「山上の説教」として有名な、次の言葉からも窺うことができる。

「貧しい人々は、幸いである、神の国はあなたがたのものである。今飢えている人々は、幸いである。あなたがたは満たされる。今泣いている人々は、幸いである、あなたがたは笑うようになる。」（新約聖書「ルカによる福音書」六章二〇～二一節）

札幌農学校の学生時代に「イエスを信じる者の契約」に署名し、アメリカ留学中にクエーカー派のキリスト教徒となった稲造は、「貧しい人々」に対する同情心がとりわけ強かった。メリー夫人の実弟であるジョセフ・エルキント

ンあての手紙で稲造は、「貧しい子供を教え育てる、このような仕事は恵みある仕事です。学校に行くたびごとに私は人間的な同情と宗教的な慈愛の気持ちに燃えて帰ってきます」と述べている。

しかし、稲造は夜学校に対する、こうした宗教的思いをけっして表面には出さなかった。上述の義弟あての手紙でも、「学校では宗教の話はしない方が無難です」とも書いている。それは「私たちがキリストの教えに従って行動する方が、言葉を用いるよりも、多くの人の心を捉える」からである。事実、遠友夜学校が設立された明治中期には、キリスト教に対する警戒意識（子供たちがキリスト教を教え込まれるのではないかという）は強かったようである。

こうしたキリスト教をめぐる当時の状況の中で、稲造が、夜学校の精神的支柱の一つにしたのが、エイブラハム・リンカーンであった。リンカーンは貧しい家庭に生まれ育ち、苦学して立身出世を遂げ、一八六一年に共和党の初の大統領として当選、第十六代のアメリカ大統領に就任した。その後、奴隷制度廃止を掲げて南北戦争を戦い、建国の理念である平等と人権思想をアメリカ社会に徹底させた。「人民の、人民による、人民のための政治」というゲティスバークの演説（一八六三年）は、わが国でも広く知られている。

“With malice toward none, With charity for all.”という扁額の言葉は、南北戦争に勝利し、一八六四年に二期目の大統領に就任した時の演説の一部である。岩波文庫版の邦訳（一九五七）から、この一文の後に続く文章を含めて引用すると次のごとくである。

「何人に対しても悪意をいだかず、すべての人に慈愛を持って、神がわれわれに示し給う正義に堅く立ち、われらの着手した事業を完成するために、努力いたそうではありませんか。」

ここには「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。」（マタイによる福音書五章四四節）という徹底した

隣人愛、および「父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しいものにも正しくない者にも雨を降らせてくださる」（同五章四五節）という、神の被造物である人間の平等思想が如実に示されている。幼き日に母親から聖書を教えられ、生涯を忠実な神の僕として歩んだリンカーンは、稲造がこの世においてもっとも尊敬し、その生き方にならった一人であった。稲造がリンカーンを苦学する夜学校の生徒たちの目標に置いた理由は、以上から明らかであろう。

With malice に始まる遠友夜学校の教育目標（校是）は、手の届かない天上にあるのではない。しかし、地上で人間が正義と隣人愛を実践し、誠実に生きるならば、それは天に富を積むことになる。そうした生き方を教え、まずもって人間形成を図ろうとするのが、遠友夜学校の建学の精神であった。私はこう考えているが、この点を裏打してくれるのは明治四二年から大正三年まで遠友夜学校の代表を務めた有島武郎（当時は東北帝国大学農科大学予科の英文学の教授）である。

有島の代表時代、教師と生徒による文集づくりが盛んであったが、その一つである「倫古龍会雑誌」（明治四四年四月発行）において、有島自身「成功とは何か」という文を書いている。その中で彼は、「事業の成功」だけを成功とみる世間の風潮を批判し、成功には「人格を作る為め即ち男をみがく事に成功するのと事業を成就する事に成功するのと此二つ」があり、「真の成功とは或る人格をきたえ上げた人が自分に適当な事業をして成功した時に言う言葉である」と述べている。他方で、「他人をふみにじって置いて自分だけが金をためたり名誉を得たりしても夫れは成功ではない」と断じている。

有島は札幌農学校の学生時代には農業経済学を専攻する一方で、新渡戸稲造の影響を受けて遠友夜学校の教師活動に熱心に取り組み、明治三一年には校歌も作詞したと言われている。夜学校では九番まである校歌のうち、通常は一、五、九番が歌われていたようだが、五番の歌詞は次のようになっている。

正義と善とに身をささげ
欲をば捨てて一すじに
行くべき路を勇ましく
真心のままに進みなば
アー　是れ　是れ　是れ
是れこそ楽しき極みなれ

ここに示した歌詞にとどまらず、校歌は全体として金やモノを追い求める生き方を排し、人間として正しい道を歩むことこそが、充実しかつ楽しい生き方であることを、力強く歌っている。

有島武郎については不倫心中事件もあって評価が分かれるところであるが、俗界に妥協せず、純真な生き方を貫いたという点では、彼の人生観と遠友夜学校の精神は共鳴し合っているのである。

三「学問より実行」－実学がつくる自律的人間－

昭和六年五月一八日の遠友夜学校訪問時に揮毫したもう一つの扁額（「学問余里実行」）については、一部に「学問より実行する」、すなわち「より」をfrom（から）と解釈する者もいる。しかし私は、「より」を比較の意味で捉え、単純に「学問より実行が大事である」と理解する。それは稲造自身の歩んだ道でもあったからだ。

周知のように、稲造は学者としても優れた仕事をしている。専門である農業経済学分野では『農業本論』や『農業発達史』を執筆し、佐藤昌介と共に日本で最初の農学博士の学位を受けている。また、植民学の草分けとして、のちに矢内原忠雄によって『植民政策講義及び論文集』として編纂された業績を世に残している。

斯学におけるこうした先駆的業績はもとより重要である。だが内外における新渡戸稲造の評価は、第一高等学校校長・東京女子大学学長など教育界、さらには国際連盟事務局次長など国際政治の舞台において、より高いものがある。また、稲造を世界的に有名にした「Bushido；Soul of Japan」は、武士道に典型的に見られる日本の伝統的な道義と思考法を世界に伝えようとした、いわば啓蒙の書であった。

その他、『修養』『一日一言』など大衆向けの人生書の上梓や精力的な講演活動などをみれば、稲造の生涯はまさに「学問より実行」（比較の意味）であったのではないか。

札幌農学校教授の傍ら創設した遠友夜学校も、稲造による「学問より実行」の現れと理解できる。稲造は農学校の学生に対して、もちろん学問の大切さを教えたものと思う。こうした学問に対する姿勢は、京都帝国大学、第一高等学校など、稲造が学生教育に携った高等教育機関においても同様であった。

しかし稲造の一貫した立場は、学問より先行して身につけるべきものが、世の中には存在する。それは、人間としての道義と社会常識である、というものであった。このことを稲造はユーモアたっぷりに「専門センスよりもコモンセンス」と語っている。

前置きが長くなったが、では、遠友夜学校のもう一つの教育目標である「学問より実行」は、具体的にはどのように発揮されたのであろうか。私は以下の三つにまとめられると考えている。

第一は、「読み」「書き」「話す」という、日本語リテラシーの習熟である。第二は、看護法・裁縫など日常生活に欠かせない技術の習得である。第三は、自立心・協調精神・礼儀などを身につけ、どのような状況の中でも強く生き抜く、自律的人間の育成である。

この三つの内容は、相互に関連しており、「社会の中で自律的に生きていくうえで必要な実学」と総括できる。第二の生活技術についてはここでは省略し、第一と第三の実際の内容について断片的だが紹介しておこう。

遠友夜学校では、平日は文部省の教科書に沿って授業がなされていたが、授業時間以外や日曜日には独自の課外活動を行っていた。課外活動の牽引車は、生徒と教師による自治会組織であり、中等部男子にはリンカーンの名前から命名した「倫古龍会」、中等部女子には「菫会」（以前は「羊会」）、初等部には「修身会」という組織があった。そして実学は主にこうした自治会組織の活動の中で実践された。

これらの自治会は、明治三〇年代から昭和初期にかけて、「倫古龍会雑誌」（「リンコルン会誌」）「文の園」「子羊」「遠友魂」などの文集を発行していた。印刷技術のまだ十分でなかった古い時代のそれは、手書き（毛筆）の文集として編纂され、生徒たちに回覧されていた。とくに大島金太郎や有島武郎が遠友夜学校の代表を務めていた明治四〇年代には、文集が頻繁に発行され、誌面には教師による随想・主張、生徒の作文などが溢れている。

これらの文集によって、生徒たちは教師の優れた文章を「読み」、自ら「書く」ことで日本語の力を身につけ、同時に習字の勉強をした。生徒たちの書いた文集を見ると、その多くが達筆である。注目されるのは、生徒の文章には「病気見舞いの文」「寒中見舞いの文」「遠方の親戚へ近況を報ずる文」など、手紙の形のものが少なくないことである。これらは多分、教師の指示によって日常使う手紙の練習のために書かされたものと思うが、ここには社会生活を生きるうえで欠かせない実学の一端が窺える。

「話す」能力の育成において大きな役割を果たしたのは、中等部男子による倫古龍会である。この会では活動の一環に弁論を取り入れ、生徒たちの「話す」訓練をしていた。そして札幌・石狩管内で毎年開催されていた中学校弁論大会に参加し、何回も優勝の栄に浴している。私がかつてお会いした遠友夜学校の卒業生はいずれも雄弁であったが、これは、弁論を通じて「話す」能力を育成してきた学校の方針からきているものと推察している。

次に実学の三番目の内容をなす自律的人間の育成に関しては、次のエピソードが参考になる。

新渡戸稲造は明治二七年の遠友夜学校設立から同三〇年の病気による札幌農学校退職まで、三年余にわたって週一

回は夜学校の教壇に立ち、おもに修身講話を行ってきた。

その当時、遠友夜学校の生徒であった倉田藤吉は、倫古龍会での稲造の話の要旨を紹介しているが、それは次のような内容のものであったという。

「各人は自己の本分を守って、主人や先輩の命ずることはよく守り、理解のできないことは更に教を乞ひて理解することに留意し、仕事に励み、同僚や先輩との間柄は自分の立場をよく考えて、決して自分が先輩だとか兄分だ姉分だなどと傲慢ぶってはいけない、どこまでも自分の立場を十分心得て、何人にも恥じない立派な態度が必要であり、自分らしさが大切であると訓話された。」

倉田は貧しい家庭に育ち、古物商の小僧になったあと母親が営む襤褸屋（古着屋？）の手伝いをしながら、遠友夜学校の中等部（中学校）に入学した。そのため、稲造の話は心に深く刻まれ、「傲慢ぶるな、人間らしくせよ」ということをその後の人生の指針としてきたとのことである。

私はこの短い訓話の中にも、キリスト者としての稲造の隣人愛と人権思想が、日常の言葉で簡潔に示されているように思われる。パウロによる「ローマの信徒への手紙」には「兄弟愛をもって互いに愛し、尊敬をもって互いに相手を優れた者と思いなさい。」（同一二章一〇節）、「自分を賢い者とうぬぼれてはなりません。だれに対しても悪に悪を返さず、すべての人の前で善を行うように心がけなさい。」（同一二章一六～一七節）とある。稲造の心の中には、こうした聖書の言葉があったものと思う。しかし、これを表に出さず、日本人向けに翻訳して語るところに彼の真骨頂がある。

遠友夜学校がめざした自律的人間の育成という点で、私の印象に強く残っているのは、昭和初期に中等部で学んだ中村幹生である。彼女には遠友夜学校創立百年記念講演会（一九九四年）の際に元生徒を代表してスピーチしてもらっ

たが、その雄弁と表現の豊かさは会場を大いに沸かせた。スピーチの中で昭和四年に新校舎が完成し、引っ越し作業を行った際のエピソードが出てくる。年長であった彼女は、夜食づくりのリーダーとして、教師に指示を与えながら短時間で一二〇人分のおはぎとタクワンを用意した。そのことを、力むことなく面白可笑しく紹介している。

教師の指示を待って仕事をするのではない。仕事の目標は教師が与えるが、具体的な準備と作業は、生徒自身が企画し、分担を決め、与えられた任務を確実に果たす。そうした自律的人間を遠友夜学校は育てていたのである。

おわりに―現代の教育に示唆するもの―

「教えたい」という教師と「学びたい」という生徒の白熱した交錯が、遠友夜学校五〇年の歴史を貫いている。『思い出の遠友夜学校』新装普及版の「解説」で、私はこうした主旨のことを書いた。今回の論稿で私は、遠友夜学校の教育目標とその実践内容について、できるだけリアルに再現しようと考えた。だが、資料の不足は否めず、きわめて断片的な紹介にとどまってしまった。

しかし、遠友夜学校の教育目標に、慈愛を根底にした人間形成と、社会で生きるうえで欠かせない実学を置いたこと、そのことが昭和六年に新渡戸稲造が自ら揮毫した二つの扁額に込められていることについては、おおよそ明らかにできたのではないかと考える。また、実学の内容についても触れたが、それらは学校でも家庭でも、現代の教育がもっともウィークな部分であり、これからの課題になっているものである。

子どもと若者における日本語力の低下、とくに文章の稚拙さには目を覆いたくなる。ケガや病気の対処法を知らない、スコップやカナヅチが使えない、縫物ができない、調理ができないなど、サービスを金で買う時代の生活技術の低下も著しい。子どもと若者の「生きる力」も弱くなっている。忍耐力がなく、些細なことで挫折する。挨拶もできず、他人とのコミュニケーションがとれない。社会や他人への無関心と指示待ち症候群は、企業でさえ困り果てている。

昭和二二年に安部能成、南原繁ら新渡戸稲造の影響を受けた者たちが中心になって制定されたといわれる、教育基本法は、第一条で次のような教育目標を掲げている。

「教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたっとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。」

これはすでに述べた遠友夜学校の教育目標と重なっている。だが近年、人間の尊厳と平和を守る教育の軽視が進み、教育基本法自体も平成一八年に全部改正された。そして現在、自己中心的で、すべてを損得で判断し、正義や善を追い求めるのはダサイといった風潮が若者の間に広まっている。

こうした軽佻浮薄の世の中で、遠友夜学校の教育実践が示唆するものは大きい。この学校の歴史をいつまでも語り続けるとともに、その評価すべき内容をこれからの教育に活かしていくことが必要なのである。

付記

文中に用いた文献・資料は次のようなものである。

札幌遠友夜学校創立百年記念事業会編『思い出の遠友夜学校』新装普及版、北海道新聞社、二〇〇六年。
札幌遠友夜学校創立百年記念事業会編集・発行『札幌遠友夜学校資料集』、一九九五年。
札幌市教育委員会編『遠友夜学校』さっぽろ文庫一八、北海道新聞社、一九八一年。
『新渡戸稲造全集』第二二巻、教文館、一九八六年。